



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	藪にらみの半生
Author(s)	大城, 常夫
Citation	琉球大学観光科学 = Journal of tourism sciences. University of the Ryukyus, 1: 7-14
Issue Date	2007-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/488
Rights	

藪にらみの半生

Some Social Findings from My Field Trips

大城常夫*
(Tsuneo OSHIRO)

編集者からは自分の半生の回顧という依頼であった。が、立ち上げ2年目の学年進行で整備中のDTSはスタッフ人事、カリキュラム、シンポジウム開催準備、学生定員増概算要求、学部構想、学科運営等含めあまりに雑多な仕事があって、定年退職の手続きすらままならない日々が続き、原稿の中身を構想する時間がなかった。それで、今回はこれまでどこかで載せたエッセイ風の拙文でお茶を濁すことをご勘弁願うことにしたい。

しかし、後輩に伝えたい時代の証言的テーマをいくつももっているの、いずれの日かエッセイ風に書きたいと思っている。たとえば米軍統治真っ只中の琉球大学学生時代、アメリカ留学時代、復帰準備をした沖縄経済開発研究所時代、琉球政府立から国立へ移管された当初の琉球大学時代、全国過疎地域調査をした内地研修、南米での戦後移民調査、ソ連崩壊を觀たイギリス・ケンブリッジでの海外研修、ベルリンの壁崩壊後の東西ドイツ旅行、上海ー東京ーソウルー台湾ー沖縄の5地域で持ち回りで毎年開く東アジア国際シンポジウム、アメリカ国務省のSEAS (東アジア安全保障シンポジウム) プログラムによる一ヶ月間のハワイ⇒ソウル⇒沖縄⇒東京⇒北京リレー式シンポジウム、沖縄イニシアティブを発表したサミット直前開催のAPAP (アジア太平洋アジェンダプログラム) 等には、私が深くかかわり、時代に少なからぬ影響を与えたテーマが多くある。

言い訳がましいが、今回は、すでにどこかで載せたエッセイ風なもの集めました。藪にらみ見方としてご笑覧下さい。

(1) 琉大生時代 (1960年代初期)

私の学生時代の話はすでに時代の遺物ではあるが、琉大の環境、学生気質の時代の証言の意味もあるのではと思ひ書くことにする。私の学生時代は1960年～64年である。沖縄はアメリカの統治下におかれていたが、アメリカは民主主義、自由、豊かな国で、多くの学生のあこがれの国で、米留の夢が当時の琉大学生にはあった。そのアメリカでは、ニューフロンティア政策を掲げて若干42歳のケネディ大統領が登場し、文字通り黄金の60年代がやってくる予感があった。しかし沖縄では植民地と変わらない統治の現実があった、キャラウェイ高等弁務官が任命され、財界に肅清、集成刑法など高圧的な米軍統治で騒然となった時代である。そのキャラウェイが64年の私たちの卒業式の来賓として出席していた。卒業生を代表して私は答辞を読んだのだが、そのなかでケネディ大統領のアメリカン大学の「平和の戦略」の演説から引いて、間接的にアメリカ統治の矛盾を批判したが、どう受け取ったか。帰り際会釈すると、キャラウェイ高等弁務官はにこりと応えてくれた。来賓席の小柄で柔和な顔のキャラウェイからは、將軍、剛腕な高等弁務官のイメージは湧かな

*琉球大学法文学部観光科学科

かった。私人としての人間の顔と権力者としての顔の落差の大きさに戸惑った。このことが印象深く脳裏に焼きついて残っている思い出の一コマである。

このような時代環境で、学生運動も活発であったが、私は直接学生運動にかかわらなかった。それでも、まだ樹木もほとんどなかった首里キャンパスの文理学部ビル前の広場は情熱あふれる学生の討論の場で、私もよく参加した。今とは違い、学生自治会長立候補者の立会演説会、自治会予算や活動報告への質疑は活発であった。自治会執行部は「学生新聞」も握っていたが、学生の批判的意見を募って載せる包容力もあった。経済学科所属のノン・ポリ学生であった嘉数啓氏（現沖縄金融開発公庫副理事長）や私などの執行部批判の意見も掲載してくれた。

学生時代は、正義感でいっぱい社会の改革を考える。そのため、一度はマルクスにかぶれるものとされたが、私はエンゲルスの「共産党宣言」や宇野弘蔵の「経済原論」を読んだ程度で、「資本論」は入り口のところだけで終わった。なぜか人間やその社会を機械的なものとして扱っている理論のような気がしていた。私は、河合栄次郎の自由主義の考えの方に魅力を感じ、彼の著作を開南の「大学書房」などの古本屋から買い集めて満足していた。とくに河合の「トーマス・ヒル・グリーン思想体系」やJ. S. ミルの「自由論」を読みふけていた。仲間と私の儀保の下宿先で読書会をもち、口角泡を飛ばして徹夜することもあった。自分の考え方、判断の基準をたどればそこに行き着くところを見ると、青春時代の大事な勉強会だったと、あのころの議論仲間感謝する年齢になっている。（出所：「歴代総代が語る琉大のお思い出」琉球大学同窓会会報第21号、平成13年3月20日）

(2) 本土から沖縄がよく見える（全国過疎地域調査から）

自動車の交通方法が右通行から左通行へ変更された昭和53年の730に、内地研修のため東京工業大学工学部社会工学科の阿部統教授の研究室に籍を置き、阿部先生の計らいで、全国町村会の付置機関である過疎問題調査会の全国調査に参加し、優良事例調査をすることができた。その調査のお陰で、日本的組織、沖縄的組織の強さと弱さや多様な日本の発見、全国に知己を得る機会になった。以下は、この調査を材料に、地域づくりの成功事例をまとめた拙著『地域発展と組織化』のプロローグである。

全国を回って地域づくりの優良事例を調べているうちに、沖縄社会の弱点は「組織化」の弱さにあるのではないかと考えるようになった。個人、家庭、企業、組合、市町村行政など、地域のいろんなレベルにおけるグループが、自らの課題を設定し、目標を達成するために合理的に行動していく社会的訓練が不足しているのではないかと、というのが私の疑問であり、そのために地域発展が遅れているのではないかと考えたわけである。

ここでいう「組織化」は、地域の土地、資本、労働、技術、情報を結びつけて新しい何かをつくり出す能力を意味している。「組織化」はシュンペーターのいう「イノベーション」という言葉で置きかえてもよい。最近「イノベーション」は技術の「革新」と狭く解釈されがちであるが、本来は、①新しい商品の開発、②新しい生産方法（技術）の採用、③新しい市場・販路の開拓、④新しい原材料の発見・利用、⑤新しい経営組織の創出などすべて含んだ概念である。つまり、経済発展の原動力は、古いものにとってかわって新しいものを生み出す創造的破壊をもたらすイノベーションにあるというわけである。

地域の発展もまさにそういう意味での「組織化」、「革新」の能力がその地域に内在して

いるかどうかにかかっており、そうした組織化あるいは革新がどのような分野でどのような形で実際おこっているか、またどのような過程で組織化、革新の能力が育つのか、実践例の中にイノベーションの実態を見つけようというのが本書のねらいである。本書では、本土の事例をもっぱら取り挙げたが、それは本土での実践例を鏡にして、沖縄の地域社会の発展をはばんでいる要因を映しだし、わがウチナーの克服すべき弱点をよりはっきりさせるためである。本書のタイトルを「地域発展と組織化」とした理由も本土の先進例を通してインプリシットに沖縄を語ることを意図したからである。

沖縄社会が「組織化」能力に弱いのは、いくつかの原因が指摘できよう。一つは、沖縄社会が本質的には、地縁血縁で結びついた農業社会で、ユイやモアイ、共同体で象徴されるヨコ社会の平等原理で動いているからともいえる。そこでは、小さな規模での農作業や冠婚葬祭は見事にこなされる。誰が命令しなくとも、親戚、知人、隣近所、地域の人々が集まって役割分担をし、仕事をなしとげていく。ヨコ社会のよさが、小規模な、局地的仕事ではよく発揮されるのである。しかし、仕事の規模が大きくなってくると、ヨコ社会はうまく働かない。沖縄の企業の多くが、家族経営、同族経営までは伸びるが、純然たる株式会社組織の経営に発展しえない限界も、市場規模や技術の問題を別にすれば、ヨコ社会の原理の限界が現われていると思われる。古い慣習、文化を純粋培養するといわれる移民社会でも同じ現象が観られる。ボリビアの移民社会で、沖縄出身者のつくっている「コロンニア沖縄」と本土出身者が拓いた「サンファン」との経済力の格差の有力な要因は、農協組織とその運営力にあると私は判断している。ブラジルでも、縫製業や製パン業など、規模はある程度大きくなりえても、下請から元請け、メーカーになりえず、株式組織にまで発展しえないでいる。南米の沖縄社会も母国の水準を超えないのが実態である。それは、やはりタテ社会の秩序、論理が通りにくいからだと思われる。つまり、効率的に、ルールにしたがって、命令支配にしたがって行動することが出来ないのである。実際、そうしたタテの組織原理によって動かそうとするとトラブルがおきている。

もっと根本的な要因をさぐれば、古くは沖縄に書き言葉がなく、最近でも記録をたんねんに付け、反省し、常に過去の成果の上に積み重ねていく習慣が、個人、企業、家庭、行政でも必ずしも定着していなかったからであろう。組織が効率的に機能するには、まず、記録をとり管理すること、実態を正確に把握し、ルールに従って合理的に運営されることが不可欠である。その訓練が不足しているのがわが沖縄ではないか。

もう一点指摘すると、長い間の被支配の歴史の下で、自ら計画し、実行することが許されなかった環境がある。

いずれに原因があるにせよ、本土と沖縄の地域づくりの差を一言でいえば、組織化する力の差である。地域の担い手である個人、家庭、企業、農協、市町村役場の行動や対応を観察すればそれは明らかといえる。この弱点を克服する途をさぐるのが本書の真のねらいである。そうした観点から、本書に収めた事例は教育、産業、健康、地域の分野にまとめているが、家庭や学校、企業や農協、市町村役場行政の「組織化」、「革新」がどのような動機、経緯でなされたか示すことに各実践例の力点がおかれている。とくにここに収められているのは、高度成長の過程で顕在化した地域の困難な問題、矛盾にいち早く気づき、あるべき地域の姿を求めて取り組みがなされ、転換が模索され、実践され、ある程度の答えを見つけた事例の紹介である。

わが国の経済は、石油ショックをはさんで高度成長から低成長へ移行した。この転換期に、「量から質へ」、「生産中心から、生活、人間中心へ」、「経済中心から福祉・文化中心へ」、「ハードからソフトへ」、「中央集権から地方分散へ」、「重厚長大から軽薄短小へ」と基本方向がかわってきた。こうした転換を主導したのは、地域（地方）である。本土の地域にはこのような時代を先取りする転換能力がある。この点が重要である。時代の矛盾やシワ寄せは最も弱いところに現われる。それが地域である。地域は全体の矛盾が露呈しやすいだけに、それだけ、生き抜くために新しい模索、実験を始めるのも早い。地域はその意味で、次代の鏡であり、先生でもある。そこには次代の地域のあり方を示す創意や工夫が見られる。いわば、組織化、革新がそこで起こっているといえる。本書で挙げた事例はそうした先進事例である。わが沖縄が学ぶべき「組織化」、「革新」を生み出す要素がその中にあると思われる。地域が新しい何かをつくる過程でとくに「組織化」の次の三要素は共分母として注目しておくことが肝要ではないかと思う。それは、リーダーの哲学、学習運動、組織の三点である。

まず、地域づくりのリーダーの哲学、発想、信念、決断が、人びとを動かし、土地を動かし、カネを動かし、地域全体をかえていく原動力になっていることだ。つまり、地域の目標を示し、そこに人材や資金を注ぎ込み、施策を集中させていくオルガナイザーの基本姿勢、信念である。そして、目標は例外なく住民の真のニーズに合ったものを選び、リーダーは独断専行せず、話し合いが基本になっている。そこから、住民の自立的積極的な対応が生まれ、自立的発展のエネルギーが生まれていることを実践例は教えている。

その二は、学習運動である。さまざまな学習運動が展開されている。学習によって、地域をよく知り、課題を見つけ、解決方法を模索する。調査研究を積み、先進例の研修を重ね、情報を蓄積している。地域づくりは、その担い手となる住人個々、あるいは集団の対応能力、「組織化」能力を高めることがカギだが、成功事例のいずれも、学習運動が活発であった。学習することによって、住民の意識や連帯が育ち、意欲が生まれる。そして、現状をより正しく認識し、自己を改革していく、あるいは、地域全体を発展させていく力が生まれる。

最後に、目標が設定され、学習運動によって、個人あるいは集団の意識、対応能力が高まっても、個人や集団の力の組織化に負うところが大きい。目標を設定し、追求する体系はどの地域づくりでももっていた。それは、記録をきちっととり、数値管理する能力を身につけること、皆んなで定めたルールを守る訓練をすることが求められる。こうした三要素が成功事例では例外なく取り入れられている。

こうした視点に留意して読んでいただければ、地域づくりにたずさわっている方々には何んらかの示唆を与えるかもしれない。それを私は願っている。（出所：『地域発展と組織化』昭和85年4月、ひるぎ社）

(3) 「てえげえ主義の功罪」（南米戦後移民調査から）

ウチナンチュという人種の行動原理を一言でいえば、「てえげえ」に集約されるのではないかと思う。「てえげえ」は「おおらか」、小さいことにこだわらない楽観的な考え方や行動を意味している場合と、「中途半端」あるいは「ルーズ」で徹底してやらないことを指す場合に使われる。「てえげえ」はこうしたニュアンスをすべてこめた含蓄のある言

葉である。ウチナンチュの考え方や行動、大げさにいえば人生観は、この「てえげえ」主義に象徴されるのではないか。以下、私の皮相的な観察による独断と偏見で、「てえげえ」主義の功罪といえそうな話の種を提供したい。

ウチナンチュの生活を端的に表現している「てえげえ」が「オキナワ・タイム」の生活リズムの象徴である。「オキナワ・タイム」は決められた時間約束に遅れることだが、取り返しのつかない時間のロスではなく、誤差の範囲というか、修正可能な「遊び」、「ゆとり」といえるものなのである。自動車のハンドルに「遊び」があると運転が楽なように、人生にも、毎日の生活にも「遊び」があれば心にゆとりができて楽しくなるのではないか。ウチナンチュは、そのゆとりを身につけているといえる。たしかに現代社会、とくに都市社会や工業社会は秒単位で人間までも動かされるコンピュータ社会になりつつあるが、こうした社会は効率的で物質的豊かさは生み出すだろうが、反比例して心の豊かさは失われていくように思う。だから、技術的に秒の世界、ミクロの世界を制御すればするほど「てえげえ」の世界を欲するのではないだろうか。「てえげえ」は産業でいえば、昔の農業社会のリズムで、朝起きて天気を見て畑にでるかどうかが決める農夫の生活リズムである。私は地域調査の折、山形県大江町で「オオエ・タイム」、四国には「シコク・タイム」があるのを知った。つまり、日本の農村にはかつてどこにでもあった生活リズムが「オキナワ・タイム」なのである。だが依然として生活のなかに頑固に保持されているのは、オキナワだけだといえる。

「てえげえ」の別の側面だと思うが、ウチナンチュは競争に淡白なところがあり、序列をつけるのが好きではないようだ。日本人は、一般に勝負ごとが好きで、何もかも序列をつけたがる。「日本一」、「どこそこ一番」に高い関心を示す。たとえば、最近の青函トンネル、瀬戸大橋フィーバーに見られるように、「一番」に渡るため、一週間以上前から袋毛布で寝泊りして席取りを競う。たしか沖縄での海洋博の際も「一番」の入場者はウチナンチュではなかった。ウチナンチュは順位にあまりこだわらない。そういったことには価値を見出さない人種のようなのである。それは、家族が集まったときに座る位置や順番、あるいは村の集会でも序列はゆるやかでないに等しく、順番がはっきりしているのはせいぜい学校での席次ぐらいのもので、序列を育てるタテ社会の訓練の場は弱く、基本的にはヨコ社会であることに起因しているかもしれない。

沖縄の高校野球が甲子園でせいぜいベストエイト止まりなのは「てえげえ」が根っこにあるからではないか。パワー、技術とも遜色ないのに勝てないのは、優勝することを最高の目的に設定できないからではないか。ピンチになっても監督はにこにこしている。生徒をリラックスさせるための計算づくの演技とは思えない。勝とうが負けようが「てえげえ」に考えていることからくる本当の笑みだと思われる。生徒にも絶対勝たねばとの意識は画面からは読み取れない。やはり、生活習慣からくる「てえげえ」は一朝一夕には変えられないのであろう。だから甲子園の優勝は100年先の話かもしれない。

さて、「てえげえ」主義も生活リズムとしては人間的でよいのだが、悲劇を生み出す場合もある。たとえば、経済活動には「てえげえ」の論理は通用しない。沖縄での倒産の最大の理由は放漫経営である。そのなかに他社を支援するために融通手形を出して自らをも倒産したT社の悲劇の事例もあった。また、戦後のボリビア移住にも「てえげえ」の悪い側面が見られる。われわれのボリビア戦後移民の面接調査では、当時、移住先であるボリ

ビアについて少しでも知っている人は37%で、何の知識もなかった人は64%にも達していた。ボリビアについて知っている人でも先輩の断片的な話や宣伝映画の知識程度で、入植地についての具体的な状況は何も知っていなかったのである。それでも50ヘクタールの土地が無償でもらえるということで移民としてボリビアにわたったのである。たしかに土地は無償であったが、入植先の「うるま耕地」はすぐに農業のできる土地ではなく、原始林に覆われた密林であったのである。おまけに、乾期には5キロ先のリオ・グランデ（川）に水を求め、雨期には洪水氾濫に見舞われる熱帯低地であった。密林を抜開して農作物を作っても市場となる都市への道路もないひどいところであった。やがて原因不明の熱病で15人の犠牲者を出し、移住先は大混乱した。そして、新たな開拓先を見つけるために放浪せねばならなかったのである。実に筆舌に尽くしがたい艱難辛苦をなめた移民は、妻や幼い子供をかかえた家族移住であった。自分ひとりの人生ばかりでなく、子供の未来を託した移民であったはずであるが、あろうことか移住先は密林だったのである。私たち調査チームもその跡を踏査してみたが、未だに道らしい路のない未開の地であった。なぜこのようなひどいところに来たのか。われわれの面接調査によると、移民の動機は、「海外へのあこがれ」、「海外雄飛」、「大農場経営」という夢と希望を持って応募した人が42%を占めた。「呼び寄せ」31%、「米軍統治」2%、「貧困」が8%となっている。この調査結果から判断すると、移住の決意は、移住先に夢と希望を託していたことがわかる。しかし移住先については正確な情報がないままの家族移住になってしまったのである。現在のように情報網が発達していない終戦後間もない時期とはいっても琉球政府の計画移民としては無謀な計画としかいえない。米国政府も移住地調査をさせているが、正確な情報が移住者に届けられていたとはいえない。また移住者の側にも移住先については琉球政府を信頼し、「てえげえ」に考えていた節があることは否めない。「てえげえ」主義がここでは裏目にでたわけである。

さて、「てえげえ」主義のよってくる根源はなにか。その一つは沖縄が基本的にはまだ農業・農村社会であるからだろう。沖縄は戦前の農業社会から一足飛びに工業社会を経ずにサービス経済中心の社会に移行した。だから時間やタテの秩序に厳しい工業社会、都市社会の経験がほとんどない。このことが、「てえげえ」を生きながらえさせていると私は考える。二つ目は、亜熱帯の気候だろう。南米や東南アジアを見ても、暑いところは生活リズムはゆっくりである。自然の法則にしたがって動いているように見える。そのほうが理にかなっている。最後に、無視できないのが「あの世観」ではないかと思う。人間が「この世」だけで生きず、「あの世」でも生き、「この世」と「あの世」と往来するという〔祖先崇拜の信仰〕ことを信じている人には、この世にそれほどこだわる理由は見出さなないかもしれない。ウチナーンチュが経済的な刺激にあまり敏感でないのは、「あの世」観によるのではないかと思う。経済的損得や序列などは、ほんとに「あの世」があると信じて生きている人には、ほんとに些細なことに過ぎないにちがいないからだ。

戦後移民の調査が教えるところは、計画・政策立案者の責任の重さと人生の岐路での「てえげえ」主義の悲劇であり、心しなければならぬ。（出所：琉球大学図書館報「びぶりお」Vol. 21 No2 1988.6.20）

(4) 遙かなるケンブリッジ (在外研究・海外レポート)

私は今年(1992年)の1月の中旬までの10ヵ月間、文部省の在外研究員としてイギリスのケンブリッジで過ごした。いろいろな意味で価値観を揺さぶられる思いであった。紙幅は限られ舌足らずになりそうだが、ケンブリッジの町や大学、人々について少し触れてみたい。

ケンブリッジは、ロンドンのほぼ北約90キロにある田園の町である。ロンドンのキングスクロス駅から電車で1時間10分、ヒースロー空港から直行バスで2時間の距離にある。ケンブリッジの町の人口は約10万人、学生数1万2千人である。そのうち、約1万人が学部学生で、残りは大学院生である。学生の1割は外国人で、91カ国から集まっているとのことである。イギリスの旧植民地からの学生が多いが、チェコ、ハンガリー、ポーランド、リトアニアなど、東ヨーロッパからの研究者、学生が目立って増えているのが、最近の特徴という。ケンブリッジは実に国際色豊かな大学である。

ケンブリッジを初めて訪れる人にとって、感嘆することが少なくとも三つある。一つは、中世から飛び出たような歴史的建物、町並みの美しさであり、その二は、取り巻く自然の美しさ、三つ目はイギリス人の生活スタイルである。まずケンブリッジの街に入ると、味のある個性豊かな建物が次々と現れる。木立に見え隠れする合掌造りの民家、教会、カレッジ、博物館などの歴史的建物が街路の両側に並ぶ。ゴシック式、ジョウジアンあるいはビクトリア様式の建物群である。ここケンブリッジではガラス張りのマッチ箱型のびかびかの近代的ビルはほとんどなく、あってもそれこそ場違いで冷たく貧弱に見える。ことほどさように歴史と伝統の価値を再発見させてくれるのがケンブリッジである。町の目立つ建物の多くはカレッジであるが、31あるカレッジのうち15は、13世紀から16世紀にかけて創設され、多くは市の中心部に建っている。最も古いピーターハウスは1284年の設立。世界でもっとも財政的に豊かなカレッジといわれる、ヘンリー8世によって創設されたトリニティカレッジは1546年設立で、チャールズ皇太子の母校としても知られている。こうした由緒あるカレッジがひしめいているなかでも、「ケインズ革命」を著し、マルクス、シュンペーターと並び称される経済学者ケインズがいたキングス・カレッジ(1440年設立)のチャペル(1515)は、内外観とも荘厳である。このチャペルはヘンリー6世によって建てられ、ヨーロッパで最も美しいといわれるゴシック式の建物で、ケンブリッジの象徴である。さらにこのチャペルの聖歌隊は世界的にその名を知られている。この聖歌隊のクリスマス・キャロルは毎年BBCで世界中に中継放映されている。私たち夫婦も去年天使の歌声を日曜礼拝で聴き、ほんとに「ぬちぐすい」をした。

またこの小さなまちには10をこす博物館、美術館、民芸館があり、一級の歴史的遺産、彫刻や絵画、焼き物、織物などを観ることができる。また常設の劇場、ホールがあって、オペラ、バレエ、音楽演奏など生の迫力を味わうことができる。大英博物館には及ばないが、一級の展示品を持つフィッツウィリアム博物館で、オキナワの18世紀の織物を発見したときは感無量であった。世界に冠たる大英博物館、ワシントンの国立美術館にも沖縄の漆器、織物が堂々とコーナーが設けられ展示されているのを観るにつけ、わがウチナーの文化力を再認識した思いであった。

ケンブリッジのすばらしさを醸し出すもう一点は、ケンブリッジの町と大学を取り巻く自然環境にある、ケンブリッジ大学はまさに田園のなかにあり、生い茂る樹木や花や芝のオープンスペースは思索するのにうってつけである。とくにバックスと呼ばれる、目の覚

めるような芝のコートが広がるカム川沿いの西、Sigewick AvenueやGrange Road周辺は栃の木、マロニエの大木が茂り、昼なお暗い。樹木の枝や芝の上ではブラックバードが歌い、リスが遊ぶ。ケンブリッジは四季折々の花が咲き乱れる。春のラッパスイセンと夏のバラがとくに印象深い。秋は熟れた木の実、紅葉に彩られる。ラッパスイセンはカム川の土手やボックスの小川沿い、カレッジの中庭、湿地に咲き乱れる。夏は色とりどり、大小さまざまなバラが咲く。イギリス人はバラが大好きな国民のようで、スコットランドの古都エジンバラ城の下の公園もバラが咲き乱れていた。ケンブリッジで最も美しいとされるボックスの庭園、公園、カレッジの中庭、民家の庭に3ヶ月以上もバラは咲き続けるのである。花と緑に加えて、ケンブリッジには中心部を抱くように蛇行する美しいカム川があり、鴨、白鳥が悠然と泳いでいる姿はまたなんともいえない調和を感じさせる。またカム川ではかんかん帽をかぶったユニホーム姿の青年が竿で漕ぐパントと呼ばれる平底の船で楽しむ観光客の風景もいかにものどかで忘れがたい。最先端の研究と教育が行われている大学町とは思えないほどの自然と町と人間の調和のとれた風景がここケンブリッジ観見られる。オックスフォードは規模が大きく荘厳な大学の建物群ではあるが、ケンブリッジは風景全体は柔らかく絵画的美しさにあふれている。

ケンブリッジの一面緑の絨毯を敷き詰めたようなカレッジのコートや公園、大木の並木道は、散策するにも、読書するにも、孤独を楽しみ思索にふけるにも最適な環境である。ほんとにこういったすばらしい学園があるのかと感嘆するだけであった。ケンブリッジは、歴史的学園町であり、文字通り木と花と田園に囲まれたガーデン・タウンある。こうした環境を育む人々の生活スタイル、これが私の興味をそそる。独創的な研究成果をつぎからつぎへと生み出すケンブリッジ大学。1989年までのノーベル賞受賞者数は62人に上るといふ。あの口もきけない天才宇宙物理学者ホーキング博士もケンブリッジにいる。創造的仕事をする人間を輩出していることは、歴史的町並みや自然環境、悠然としたイギリス人の生活、ユックリズム（スローライフ）と無縁ではないだろう。イギリス人のユックリズムは、生き方として選択された生活スタイルで、われわれ亜熱帯、熱帯の怠惰に似たユックリズムとは似て非なるものようである。イングリッシュ・ブレックファーストにこだわり、午前午後のティータイムにこだわり、パブにこだわり、ビターのビールにこだわる。また、ドーバー海峡を渡ればそこはヨーロッパ大陸があり、フランス料理、イタリア料理、スペイン料理、ドイツ料理といううまい料理があるが、まねるのを潔しとせず、まずい（イギリス人はそう思っていない）イギリス料理をうまそうに食べ続けているイギリス人。ケンブリッジで出会ったイギリス人は、とっつきにくいだが温かい。秩序や習慣、マナーを大事にする。あわてず、我慢強く、話好き・議論好きで、皇室を愛する国民である。奥さんがイタリア人のイギリス東南部のランズエンド出身のホストの友人夫婦と私たち夫婦が招かれた家庭で出された料理にイタリア人の奥さんが、一般論なのか皮肉なのか微妙だったが、「イギリス料理はまずい」というと、すかさずホストは「イギリス人は食うために生きているのけはなく、生きるために食っている」とやり返した。これがイギリス式ユウモアなのだろうと感心してやり取りを聞いていた。コーヒーカップ一つからでも1時間も話せるというイギリス人の教養の高さを垣間見た夕食会で、楽しいひと時であった。

話は中途半端だが、愛すべきイギリス人の素顔の紹介は別の機会に譲ることにして稿を閉じることにする。〔「海外レポート」琉大広報委員会、『なかゆくい』No91、1992・9・30〕